



世界に冠たる技術と工業集積を誇り、
ものづくりの喜びを分かちあう街

大田区・町工場

23区でいちばん面積の広い区、大田区。西に田園調布、千束、雪谷といった高級住宅地をかかえ、東に蒲田・大森を中心とした、その規模と多様性で全国でも類を見ない工業地帯をかかえる区。工業ばかりではない。商店街の数の多さでも23区で1、2を争い、今も江戸前の穴子や浅利を採りに漁に出る者もいる。JR・私鉄各線はもちろんのこと、羽田空港を擁し、環状7・8号線、第一・第二京浜、首都高、新幹線が横切り、東京湾に面して、陸海空あらゆる交通の要所でもあるこの区は、東京都の縮図ともいわれている。

取材・文 竹沢えり子 写真 石室英介



多摩川沿いに建ち並ぶ工場も、どんどんマンションに建て替わっている。多摩川をはさんで川崎市。かつていくつもの煙突が煙をたなびかせ京浜工業地帯がひろがっていた

工業のまち、大田区

大田区産業の始まりは、麦藁細工と海苔の養殖業である。麦藁細工は江戸時代より大森・蒲田の土産品として栄え、明治年間まで重要産業であった。明治41年に、東京瓦斯の大型工場が建設され、この頃から近代工業化の波が押し寄せる。これは近隣の品川、川崎からみれば、かなり出遅れていた。大正期になって、大正デモクラシー

を象徴するような工場が蒲田に現れる。銀座に本社をもつタイプライターの黒沢商店が、白樺派の「新しき村」の影響を受けた理想郷的工場村を建設したのである。敷地内には113棟の瀟洒な住宅が建ちならび、社員は菜園を耕し、子女の教育のため、敷地内に幼稚園、小学校がもうけられた。大倉陶園は、チューリップ、ヒヤシンスが絶えることのない、四季の花々に囲まれた工場を建設。三省堂はアメリカ

カの田園都市の最新工場をモデルにした工場を建て、女子工員は紺の袴を着用して出勤し話題となった。東洋オーチスエレベーターは、総ガラス張り、洋式便所を備えた工場を建て、松竹キネマが東洋のハリウッドをめざして撮影所をつくったこととあいまって、蒲田周辺は一気に、近代産業の情報発信地となったのである。工員たちは最先端の産業を担う誇りにあふれていた。しかしその後、戦争が近づくにつれ、

集まった工場群は、軍需産業化していき。そしてそのために、第2次世界大戦中、蒲田周辺はなんと19回もの空襲にさらされ、焼け野原となってしまふ。戦後の復興は、鍋、釜、弁当箱づくりから始まった。昨日まで兵器をつくられていた、焼け残った機械を使って、生活するための日用品をつくったのである。

それが朝鮮戦争特需によって一気に技術力を高めてゆく。これが現在まで続く大田区町工場の原点といってよい。

一方、大田区の主要産業として続いていた海苔の養殖業は、昭和37年、東京オリンピックのための港湾整備により漁業組合が漁業権放棄をしたため、存続できなくなった。広い海苔干し場は町工場へと変わっていったのである。

金属から教えられた、ものづくりの喜び

北嶋一甫かずとしさんの経営する北嶋絞製しぼり作所は、昭和22年創業。戦争が終わった時、畳屋を営んでいた北嶋さんのお父さんは戦後、畳をつくるうえにも材料のない事態に直面し、またアメリカ式の生活が入り込んでくる様を目の当たりにして、「畳がなくなることはないだろうが、増えることも決してないだろう」と直感した。そこで、たまたま親戚の者が身につけていた「絞り」の

技術を取り入れて、金属加工の会社を興したのである。

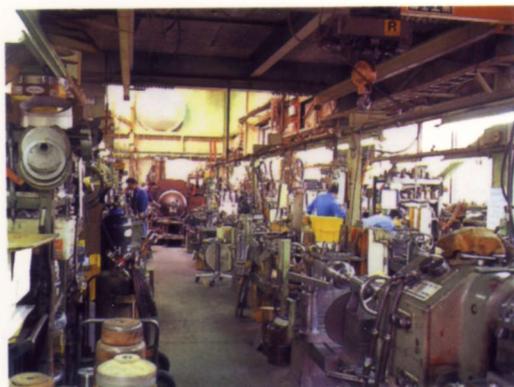
「絞り」とは、へらという道具を回転する金属板に当てることによって変形させていく技術。さまざまな硬さの金属板が面白いように形を変える。陶芸のろくろと同じである。職人は脇に

はさんだへらから伝わる微妙な感覚で、驚くほど正確に金属の厚みや伸び具合をつかみ、絞っていく。1人でへらができるようになるまで、7〜8年。それでもまだ一人前とはいえず、「私なんか、50年やってもまだまだ、金属を絞るところか、逆に絞られているよ

うなものですよ」と、北嶋さんは笑う。絞るものは、新製品開発のための試作品や、照明笠、医療用器具、寺の擬宝珠ぎぼし、パラポラアンテナ、宇宙船・原子力発電所の部品等、円形のものなら何でも、あらゆる範囲にわたる。以前は鍋、釜や茶筒もあったが、さすが



金属板を回転する型にあて、へらで押さえる（絞る）と、ろくろの原理で金属板はみるみる変形していく。てこの原理で、へらが長いほど強い力が加わるので、硬い金属ほど長いへらを用い、軟らかい金属は短く持つ



さまざまな大きさや型に対応できる機械が並ぶ。ここでは機械が、人間と一体となった道具に見える



金属に「焼きナマシ」をする作業。焼きナマシをすることで、絞って硬くなった金属を軟らかくする



大型物は木で型をつくる。木の伸び縮みを調整しながら正確な型をつくる「木工」の仕事も、金属絞りのための大事な仕事のひとつ。右後ろに見えている金属はパラポラアンテナである

に大量生産のものは機械のほうが効率
がよく、今では絞りの技術に求められ
るのは、精度の高い、多品種少量の
のばかりである。

さまざまな難題が持ち込まれるが、
「人間が書いた図面ですからね。でき
ないものなんてありません。不可能と
思ったら終わり。どうやったらでき
るか、できるまで考える。創意工夫で
す」。そうやって、へらの形を考える。



さまざまなへら。注文された製品に合
わせて、適切なへらの形を考える。長
さ・太さもまちまちだ



型の数々。へらと型の道具立て、工程
を創意工夫することで、あらゆる円形
のものが生み出される



1/20ミリの板厚減少は認め
ると指定された製品をつくるため、
底面の厚みを一定にしながら何回
もの工程が踏まれる

絞りとは金属を伸ばしていく作業だが、先端を厚くし
なくてはいけないかった製品の断面。いくつもの型と工
程が必要



航空機・宇宙機器等の部品。厚みが一定でない、安
全性に大きく影響する



工程を考える。そして金属を絞る。金
属は、「そんな道具立てで絞られてた
まるか」と逆らう。それでまたさらな
る考えて道具をつくる。それを繰り返
して、できあがったときの喜び。「も
のづくり冥利につきます」と北嶋さん
は言う。
「こうやって私たちは、金属に教わ
ってきたし、生かされてきました。
何か頼まれたときは、実際に絞りの

大田区工業の特徴

工場数は約5000。数としては減少傾向にある。
その構成は機械金属工業の分野に著しく特化し
ている。

製造品出荷額は、東京都全体の約9%。

一般機械器具製造業の生産高は東京都全体の
約30%、全国の約1%を占め、一地域の生産規
模としてはきわめて高い割合である。

企業規模は従業者規模3人以下の家族経営的
形態の企業が区内工場数の約50%、9人以下を
含めると約82%。

大半は下請け加工だが、特定の大企業系列下
にある企業はむしろ少数で、多くの企業は、独
自の技術によって複数の得意先を持っている。
高地価で緻密な大都市市街地において小零細企
業が存続できるのは、職住近接で長時間労働が
でき、短納期対応が可能な小回りのきく経営体
であったこと、個々の企業が特化した技術・技
能を有していること、地域のネットワーク力があ
ること、等が要因である。

平成18年8月に、(財)大田区産業振興協会の
実施した調査によれば、「人材の不足」を感じて
いる企業が7割強。従業者の平均年齢は44歳。

参考文献 大田区産業経済部産業振興課・(財)大田区産
業振興協会「大田区工業ガイド」

現場を見ていただいて、まず話しあう。
話しあうなから信頼感が生まれます。
そして人のぬくもりとあたたかみのあ
るモノをつくって人に渡します。金属
はかわいいですよ。出荷するときは、
娘を嫁に出すようなものです」
そう語る北嶋さんは、何年もかけて
人が身につけた技能と、それによって
生まれた「娘のような金属」を決して
安売りすることはしない。現場を見れ
ば、どれほど大変なことをしているか
わかってもらえる。

「うちの工場はすべてオープンです。
どこの写真を撮ってもかまいませんよ。
知ってもらって、よいところはどんど
んまねをすればいい。そしてお互い切
磋琢磨して、技術を向上することが大
事だと思うのです」まねしたくとも簡
単にまねのできない、人の技能に支え
られた誇りがそこにある。

北嶋さんのところには、国内外から、
さまざまな視察団がひっきりなしに訪
れる。小中学生の工場見学もある。小
中学生には、実際に絞りを体験させ
て、ものづくりの一端を知ってもらっ
子どもたちは大喜びで、自分のつくつ
た金属容器を大切に持ち帰る。そのた
めの金属板の1枚や2枚、どうという
ことはないのだと、北嶋さんは涼しい
顔である。

北嶋絞製作所では、息子さんたちが
すでに後継者として一緒に働いている。
町工場全体で、後継者不足が問題にな
っていることを話すと、「後継者は、
いないのではなくてつくっていないだ
け。毎晩お父さんが夕食の席で暗い顔
をしながら、工場は大変だとか、もう
やめたいとか言っていたら、息子たち
も継ぎたくなくなります。でも、仕事
する喜び、ものづくりの喜びを話して